

時代の風

加藤 陽子
東京大教授

原発事故失敗生かすには

新聞各紙は、6月7日午前、東京電力福島第一原子力発電所の事故原因説明や安全規制のあり方を検討する事故調査・検証委員会の初会合が開かれたと報じた。委員長が細村洋太郎氏だと聞いて、少しだけ明るい気分になった。

氏が「原因究明を優先するため責任追及はしない」と語ったことで、早くも不安を抱いた方もいるかもしれない。たしかに、氏が語ったいくつかの原因究明と責任追及の関係については、少し説明がいるだろう。

細村氏は知る人ぞ知る「失敗学」の創始者で、科学技術分野における主要な失敗の事例を系統的に分析してきた第一人者である。手近なパソコンでいじり、お暇な折に「細村洋太郎のすすめ 細村創造工学研究所」で検索してみてもいい。そこに載っている失敗知識データベースは、知りたい人が知りたいときに、

の例が、失敗情報の「歪曲化」の例としてチェルノブイリ原発事故が挙げられているのを見れば、誰しも背筋に冷たいものが走るのではないかと

から孫まで世代が隔たれば、情報伝達という点で減衰化は免れられなくなる。

減衰化とは聞き慣れない言葉だろう。明治や昭和に何度もおける津波被害を受けた三陸に

た事故の原因について「連政府は、運転員の規則違反だと説明した。真の原因は、規則違反に加え、原子炉そのものの構造的欠陥にあったが、西側諸国は自国内での原発運

煙村氏が卓抜に表現するよう、失敗の原因は「変わったがる」のである。

急速に減衰化し歪曲化されやすき性質をもつ失敗情報。まことに気難しい性質を生まされた。この失敗情報を知ら

を聞き出すとき、細心の注意を払わねばならない。

ポイントとは、人間の関わりという点で、望ましくない結果の二つ。ごく緩やかに定義することで、かえって、自然の猛威という大前提と、た

主観的情報ワクチンに

のような大惨事を起こさないように返される。だが、事故は繰り返される。その構造的要因について細村氏は、失敗情報「知識化」が、きわめてまれにしかなされてこなかった点に求めた。

失敗の知識化とはそれほど難しいものなのだろうか。答えはイエス。5年前に刊行された本書の中で、失敗情報

の「激激な減衰化」の例として若手県立古市姉吉の津波石碑

だが「此処より下に家を建てな」との石碑の戒めも、減衰化を免れなかった。祖父母を黙って受け入れた。まさに



一手塚耕一郎撮影

動の激化を恐れ、運転員の規則違反によるこの連側説明を黙って受け入れた。まさに

それを当事者へおもむくことを意味しない。いったん失敗情報が知識化され、客観的な脈絡ある図が描ければ、第三者は矛盾点を発見でき、当然の猛威という大前提と、た

衝動にかられる。だが、自然の猛威がそのまま入力された結果、今回のような事態が出力されたとは誰も思わないだろう。そこには人間の関与と、入力と出力をつなぐ仕組みやカラクリがあったはずなのだ。要因と結果をつなぐカラクリ。それを浮かび上がらせる失敗学は、タフで優れた手法だといえるだろう。

原因究明の前には責任追及も後回しにされるゆえんを説明してきた。それは、最も有効に知識化しようとする情報を取り出すためだった。だが、いま一つ別の理由もある。それは、当事者が、どのようなことを考え、どのような気持ちでそのような行動をとったのかという、当事者の側に立った主観的な情報を取る必要があるからだ。主観的な情報こそが、実のところ将来起こりうる事故や失敗を未然に防ぐワクチンとなりうる。失敗学の勘所は、実のところ歴史学をめざすところと同じだ。心からのエールを送る。